

# 視聴覚アーカイブ活動の基本原則に関する調査： ユネスコ『視聴覚アーカイブ活動 ——その哲学と原則 第3版』を中心に

石原香絵

## 論文要旨

長年にわたってアーカイブズ振興に取り組んできたユネスコは、アーカイブズの一部を占める視聴覚資料を確実に収集・保存し、アクセスを提供する活動の基盤となる知識を体系化すべく、オーストラリアを代表する視聴覚アーキビストのレイ・エドモンドソンに基礎文献の執筆を委託した。この基礎文献は初版が出版された1998年以来読み継がれ、最新の『視聴覚アーカイブ活動——その哲学と原則 第3版』が2016年に出版されたところである。視聴覚アーキビスト養成やネットワーク強化の重要性を説き、専門用語を定義し、デジタル格差・アドボカシー・環境インパクトといった新しいトピックを取り入れつつも、視聴覚アーカイブ活動の揺るぎない根幹を成す哲学と原則を講じる同文献は、日本におけるこの領域の立ち遅れを改善するための示唆に満ちている。本調査の成果として2017年に完成した邦訳の公表をきっかけに、視聴覚資料の救済に向けた議論の深まりが期待される。

**キーワード**【ユネスコ、視聴覚アーキビスト、レイ・エドモンドソン、アーカイブズ、視聴覚資料】

## はじめに——本調査の背景と目的

2016年の春、国際連合教育科学文化機関（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization、以下ユネスコ）が *Audiovisual Archiving: Philosophy and principles* の第3版を出版した（邦題は『視聴覚アーカイブ活動——その哲学と原則 第3版』、以下『視聴覚アーカイブ活動 第3版』とする）。視聴覚資料は動的映像（映画作品やテレビ番組等）と音声記録から成り、時間とともに受容されること、そしてテクノロジーへの依存度が高いことが主だった特徴として挙げられる。視聴覚資料のはかり知れない歴史的・文化的・美学的価値をユネスコが認めても、それを確実に収集・保存し、広くアクセスを提供するための、つまり視聴覚アーカイブ活動のための社会的な制度は、日本を含め世界の多くの国や地域において未整備であった。多様な記憶機関が存在する中でもとくに視聴覚アーカイブ活動を独立した領域と見なし、専門機関の設置根拠や視聴覚アーキビストの存在意義を確固たるものにする

には、その領域に特化した倫理、哲学、原則が不可欠であり、何よりそれらを成文化する必要があった。

そこでユネスコは視聴覚アーカイブ活動の基盤となる知識を体系化すべく、オーストラリアを代表する視聴覚アーキビストのレイ・エドモンドソン (Ray Edmondson 1943-) にその仕事を委ねた。結果としてエドモンドソンが1998年に上梓した *A Philosophy of Audiovisual Archiving* [視聴覚アーカイブ活動の哲学] は、2004年の *Audiovisual Archiving: Philosophy and principles*、そして2016年の『視聴覚アーカイブ活動 第3版』と版を重ね、視聴覚アーキビストを目指す学生や現場の実務者のあいだで20年以上読み継がれてきたことになる。

ところで、同文献の邦訳が初めて出版された2006年から既に12年が過ぎたが、日本では視聴覚資料を所蔵する記憶機関においても、フィルムアーカイブに代表される専門機関においても、視聴覚アーカイブ活動の基本原則に基づく方針や職務が定められているわけではない。加えて、問題が深刻化して久しい視聴覚メディアを巡るフォーマットの旧式化や急激なデジタルシフトへの対策も追いついていない。こうした状況の中で、ユネスコの提唱する基本原則に立ち返ることは少なからぬ意義があるのではないか——筆者はこのような思いから、『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の翻訳作業に着手した。

本報告は、本調査の具体的な成果物として2017年に公表した日本語版『視聴覚アーカイブ活動 第3版』を補足し、読み手の理解を助けるものとした。そこでまず概観するのは、長年にわたるユネスコの視聴覚アーカイブ活動に対する支援についてである。次に、日本では十分に知られていない視聴覚アーキビストとしてのエドモンドソンの功績を称えとともに、出版に至る経緯を駆け足で辿る。続いて『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の中身へと移り、初版や第2版と比較しながら新たに加わった事項にも目を向ける。最後に結論を述べ、以上をもって調査報告とする。

## 第1章 ユネスコによる視聴覚アーカイブ活動の支援

### 1 「動的映像の保護及び保存に関する勧告」(1980年)の採択とその効果

国際連盟の国際知的協力委員会を思想的な基盤として、ユネスコは第二次世界大戦終結後の1946年に誕生した。日本はまだ国際連合に加盟を許されなかった占領期の1951年に世界で60番目のユネスコ加盟国となり、以後一貫してその活動に参加してきた。

1970年に採択された「文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡を禁止し防止する手段に関する条約」(文化財不法輸出入等禁止条約)の第1条において、「音声、写真又は映画による記録」が「文化財」の分類のひとつに加わって以来<sup>1)</sup>、ユネスコの条約、勧告、宣言等の文化財の範疇に視聴覚資料が含まれるようになった。それに飽き足らなかったのが当時の東ドイツ国立フィルムアルヒーフ代表にして後の国際フィルムアーカイブ連盟

(International Federation of Film Archives, FIAF) 会長、ヴォルフガング・クラウエである。クラウエが動的映像に特化した国際協定の必要性を発議したのは、1974 年の第 18 回ユネスコ総会においてであった。その翌年、東ベルリンで開かれた「動的映像保存会議」に参加した 14 カ国の代表は、動的映像に関連する勧告の採択に向けた議論を本格化させた。ところが日本はこの議論の方向性に難色を示し、第 20 回ユネスコ総会では採択の延期を促す立場から決議の際に席を外した。40 カ国の代表が参加した 1980 年の「動的映像の保護保存に関する勧告 政府専門家会議（草案策定会議）」では日本の修正案が認められ、動的映像資料の収集・保存を国家事業として成立させようとする当初のクラウエの意図は薄れてしまった<sup>2)</sup>。

非営利の公共機関の側に強い発言権や決定権を持たせるには至らなかったものの、「動的映像の保護及び保存に関する勧告」(Recommendation for the Safeguarding and Preservation of Moving Images) は 1980 年 10 月 27 日、第 21 回ユネスコ総会において採択された。前文で動的映像の教育的、文化的、芸術的、学術的、歴史的な価値と保存の必要性を説き、第 1 章で動的映像を明確に定義し、第 2 章で一般原則について、そして第 3 章で勧告される法律的・行政的措置、技術的措置、補足的措置について述べ、第 4 章で国際協力の大切さを強調する同勧告は、動的映像アーカイブのための予算付与や法整備を訴え、動的映像アーカイブを持たない国や地域には新たに設置するよう促し、動的映像資料が法定納入制度の対象から外れている場合は状況の改善を求める<sup>3)</sup>。

「動的映像の保護及び保存に関する勧告」の草案策定会議で議長を務めたサム・クーラによると、同勧告の採択に背中を押され、各地で専門家が視聴覚資料の保護・保存に主眼を置くセミナーやシンポジウムを開くようになった<sup>4)</sup>。1983 年には世界の視聴覚アーキビストが集う研究発表の場として現在まで続くジョイント・テクニカル・シンポジウム (JTS) も始まった。JTS 等を通して人的交流が深まる中で、1990 年に動的映像アーキビスト協会 (The Association of Moving Image Archivists, AMIA) が誕生し、後にクーラは会長に就任した。

ユネスコはほぼ例外なく「動的映像」もしくは「視聴覚」といった大きな枠組みで資料の保護・保存を訴え、対象を「映画」や「テレビ」にまで限定することはない。FIAF や AMIA をはじめ多様な文脈から発展してきた国際機関を束ねることを目指してユネスコが 2000 年に設置した視聴覚アーカイブ機関連絡協議会 (Coordinating Council of Audiovisual Archives, CCAAA) には、現在 8 機関が加盟する【表 1】。デジタル時代に入ってからというもの、CCAAA 加盟機関の連携の必要性は高まるばかりである。「動的映像の保護及び保存に関する勧告」の対象はフィジカルなアナログ記録に限定されたが、後の時代に登場したノンフィジカルなデジタル記録については、ユネスコが 2015 年に採択した「デジタル形式を含む記録遺産の保護及びアクセスに関する勧告」が対応する<sup>5)</sup>。

表 1 視聴覚アーカイブ機関連絡協議会 (CCAAA) 加盟 8 機関

機関の名称および略称	設立年	会員数 <sup>6)</sup>
1 国際フィルムアーカイブ連盟 FIAF	1938	75 カ国 166 団体
2 国際公文書館会議 ICA	1948	199 カ国約 1,900 団体
3 音声記録コレクション協会 ARSC	1966	約 1,000 個人
4 国際音声・視聴覚アーカイブ協会 IASA	1969	70 カ国約 400 団体 / 個人
5 国際テレビアーカイブ連盟 FIAT/IFTA	1977	約 250 団体
6 国際商業視聴覚ライブラリー連盟 FOCAL International	1985	約 300 団体 / 個人
7 動的映像アーキビスト協会 AMIA	1990	30 カ国約 1,000 個人
8 東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイブ連 SEAPAVAA	1996	25 カ国 58 団体 31 個人

## 2 「RAMP スタディーズ」と視聴覚アーカイブ活動の研究

1960 年代からアーカイブズに直結する知識の普及に取り組んできたユネスコは、1977 年に「総合情報プログラム」を設置し、その 2 年後、同プログラムに「記録・アーカイブズ管理プログラム」(Records and Archives Management Programme, RAMP) を特設してアーカイブズ振興を強化した。1990 年代までに蓄積された 100 件を超える報告書や指針から成る「RAMP スタディーズ」には、視聴覚資料に関連する文献が 4 件含まれる<sup>7)</sup>。中でも 400 頁を超える厚みの *Audiovisual Archives: A practical reader* [視聴覚アーカイブ：実用読本] (1997 年) は、先述のクラウエによる「教育／養成」やクーラによる「評価選別」に加え、「目録作業」「技術」「情報検索」「災害対策」等 13 セクションにわたって視聴覚アーキビストが身につけるべき基礎知識の大枠を示した。そしてこのとき「倫理／哲学」のセクションを執筆したのが、ほかでもないエドモンドソンであった。

日本のアーカイブズ学研究の第一人者・安澤秀一によると、「動的映像の保護及び保存に関する勧告」採択から 3 年後の 1983 年——ちょうど JTS の始まった年——に総合情報プログラムの視察目的で来日したフランク B. エヴァンス (元米国アーキビスト協会会長) は、「今日のアーカイブズにとって重要な四つの問題」を論じる中で、アーキビストが取り組むべき課題のひとつとして「非伝統的媒体による非印刷情報」を挙げた<sup>8)</sup>。しかし残念ながら、国内のアーカイブズ学の領域が文字以外の記録や紙以外のメディアに目を向けることはなく、1990 年代以降も視聴覚資料に関連するユネスコ文献が日本に紹介されることはなかった。エドモンドソンの著作も含むこの領域の基礎文献の邦訳の登場は、デジタル化の波が押し寄せる 2000 年代後半まで待たねばならなかったのである【表 2】。

## 3 〈世界視聴覚遺産の日〉の制定と〈世界の記憶〉への視聴覚資料の登録

「動的映像の保護及び保存に関する勧告」の採択から 25 年の節目を祝って、2005 年の第 33 回ユネスコ総会は採択日の 10 月 27 日を〈世界視聴覚遺産の日 World Day for Audiovisual

表 2 視聴覚アーカイブ活動に関連する基礎文献の邦訳

オリジナル文献	発行年	邦訳	発行年
<i>Audiovisual Archiving: Philosophy and principles.</i> UNESCO	2004	視聴覚アーカイビング：その哲学と原則／財団法人放送番組センター	2006
<i>Film Preservation Guide: The basics for archives, libraries, and museums.</i> National Film Preservation Foundation	2004	フィルム保存入門：公文書館・図書館・博物館のための基本原則／NPO 法人映画保存協会	2010
<i>The Digital Dilemma.</i> The Academy of Motion Picture Arts and Sciences	2007	ザ・デジタル・ジレンマ／慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構	2008
<i>Keeping Archives, 3rd.</i> The Australian Society of Archivists	2008	キーピング・アーカイブズ 第3版 (第17章 音声記録、18章 動的映像)／NPO 法人映画保存協会、勉誠出版	2012
<i>The Digital Dilemma 2.</i> The Academy of Motion Picture Arts and Sciences	2012	デジタル・ジレンマ 2／東京国立近代美術館フィルムセンター	2015
<i>Audiovisual Archiving: Philosophy and principles, The third edition.</i> UNESCO	2016	視聴覚アーカイブ活動——その哲学と原則 第3版／NPO 法人映画保存協会	2017

Heritage〉と定めた。映画フィルムと再生ボタンを模ったロゴマークや毎年のスローガンとともに、現在では CAAA 加盟機関の多くがこの記念日に何らかの催事を企画する<sup>9)</sup>。

日本では、2008 年に東京国立近代美術館フィルムセンター (National Film Center, NFC, The National Museum of Modern Art, Tokyo) が記念特別イベントを開始し【表 3】<sup>10)</sup>、2018 年春に NFC が東京国立近代美術館から独立して国立映画アーカイブ (National Film Archive of Japan, NFAJ) となった後も継続している。最新の「製作 50 周年記念『2001 年宇宙の旅』70mm 版特別上映」はとりわけ注目を集め、全 12 回の前売り券は即時完売し、当日券を求める人々が連日早朝から列をなした。同時期、国内各地の IMAX を備えたシネマ・コンプレックスも同作品のデジタル版を上映したが、70mm 版は現在の日本で NFAJ だけが提供できる稀少な上映体験である。上映前後のカーテンの開閉、オープニングとエンディングのサウンドトラック、客電、途中休憩等のタイミングは出来得る限り初公開時に近づける努力を惜まず、一方で公開当時の劇場に比較してかなり小さいスクリーンサイズ等、オリジナルとの違いは詳しい解説を配布することによって埋め合わせた<sup>11)</sup>。このイベントをきっかけに初めて NFAJ を訪れた映画ファンも少なくなかったはずである。〈世界視聴覚遺産の日〉のような記念日を祝う催事はアウトリーチやアドボカシーに有効に結びつく可能性を秘めているだけに、今後 NFAJ 以外の記憶機関にも浸透していくことが期待される。

ここで視聴覚アーカイブ活動に関連するユネスコのもうひとつの事業、〈世界の記憶 Memory of the World〉についても簡単に触れておこう。〈世界の記憶〉には 2017 年までに



表 3 東京国立近代美術館フィルムセンターによるユネスコ〈世界視聴覚遺産の日〉記念特別イベント

開催年	スローガン
	イベント名
2008	失われた無声映画再現公演企画 甦る『新版大岡政談』
2009	Facing Heritage: We Can Save It [遺産と向き合う：私たちなら救済できる (仮)]
	『幸福』特別上映会 シルバー・カラーの復元
2010	Save and Savour Your Audiovisual Heritage - Now! 今、あなたの視聴覚遺産を守り味わおう
	3D 映画の歴史／講師 ミュンヘン映画博物館ディレクター シュテファン・ドレスラー
2011	Audiovisual Heritage - See, Hear and Learn! 視聴覚遺産——見る、聞く、学ぶ！
	映画はどこで、どのように保存されているのか 日／米ナショナル・フィルム・アーカイブからの報告／ゲスト 議会図書館映画放送録音部 国立視聴覚保管センター (バックカード・キャンパス) ディレクター パトリック・ロックニー
2012	Audiovisual Heritage Memory? The Clock is Ticking もう時間はない——視聴覚遺産＝人類の記憶を守ろう！
	講演と弁士・伴奏付き上映 日活映画の起源
2013	Saving Our Heritage for the Next Generation 次世代のために守る私たちの映画遺産
	伝説の映画コレクション 早稲田大学演劇博物館所蔵フィルム特別上映会
2014	Archives at Risk: Much More to Do 危機に立ち向かうアーカイブ——やることはもっとある
	関東大震災記録映画フィルムの発見——デジタル保存とその活用
2015	Archives at Risk: Protecting the World Identities 危機に立ち向かうアーカイブ——個性豊かな世界を留めておくために
	「ホームムービーの日」in 京橋 アマチュア小型映画のこれまでとこれから
2016	It's Your Story - Don't Lose It 捨てないで、あなたの大事な物語を。
	無声映画遺産とアーカイブ
2017	Discover, Remember and Share 発見、記憶そして共有
	特別上映会 甦る 70 mm 上映『デルス・ウザーラ』

110 を超える国、地域、国際機関等から約 430 件の「直筆の文書、書籍、ポスター、絵、地図、音楽、写真、映画等」が登録されてきた。米国に本部を置く音声記録コレクション協会 (Association for Recorded Sound Collections, ARSC) 【表 1】が申請したレオン・スコットによる世界初の音声記録「フォノトグラフ」、ドイツのムルナウ財団が所蔵する無声映画の金字塔、フリッツ・ラング監督『メトロポリス』(1927 年)、韓国放送公社 (KBS) が 1980 年代に放映した離散家族を引き合わせる生放送番組のビデオテープ 463 本等、視聴覚資料の登録はおおよそ 70 件にもなる<sup>12)</sup>。

エドモンドソンは 2 期 8 年務めた〈世界の記憶〉アジア太平洋地域委員会 (MOWCAP) の議長の座を 2014 年に退いた後も、アドバイザーとして同委員会に関与し続ける。そして

2016年のAMIA会議では、〈世界の記憶〉登録の利点、登録すべき視聴覚資料の選定、過去の申請の成功事例、審査基準、提出書類の作成、登録後に生じる義務等を総合的に学ぶワークショップの講師を担当した<sup>13)</sup>。CCAAAも〈世界の記憶〉へのさらなる視聴覚資料の登録を呼びかけている。日本の視聴覚資料を登録する動きは見受けられないが、実現すればユネスコの知名度にも助けられ、国内の記憶機関等で厳しい状況に置かれている視聴覚資料の価値が全体的に引き上げられるのではないだろうか。

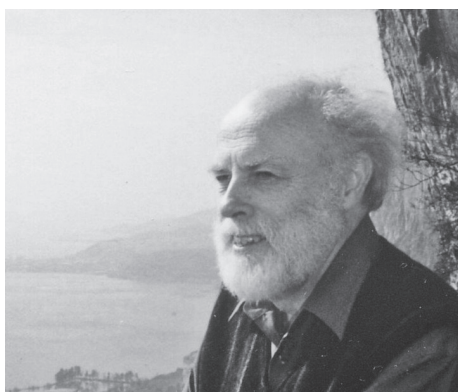
## 第2章 『視聴覚アーカイブ活動——その哲学と原則 第3版』の出版

### 1 視聴覚アーキビストとしてのレイ・エドモンドソンの実績

ニューサウスウェールズ大学を卒業したエドモンドソンがオーストラリア国立図書館フィルム・ライブラリー部門で司書としてのキャリアをスタートさせた1960年代末、FIAFはフィルムアーキビストの研修プログラムとして現在も続く「FIAFサマースクール」の準備を進めていた。また、元FIAF会長でポーランドの映画研究者イエジー・テプリツがメルボルン近郊にあるラ・トローブ大学の客員教授に就任し、当時のオーストラリア国立図書館カウンシルに対して視聴覚アーカイブ機関の「独立」を提言してもいた。テプリツの薫陶を受けたエドモンドソンは欧米のフィルムアーカイブを5カ月かけて視察した後、1973年にクラウエ率いる東ドイツ国立フィルムアルヒーフで始まった第1回FIAFサマースクールに参加した。

1980年代初頭、オーストラリア国立図書館映画部門ディレクター時代には、青年がライトバンでオーストラリア全土を旅して映画フィルムを探索するというテレビ局とのタイアップ企画「ラスト・フィルム・サーチ」によって、数多の映画遺産を発見・取得することになった<sup>14)</sup>。このアドボカシーを兼ねたアウトリーチ活動の成功を原動力として、オーストラリア国立フィルム＆サウンドアーカイブ（National Film and Sound Archive, NFSA）が1984年に国立図書館からの独立を果たした。エドモンドソンが41歳の若さで副館長に就任した2年後、オセアニア初のFIAFキャンベラ会議のホストとして国際舞台にデビューしたNFSAは、いまやフランス国立視聴覚研究所（L'Institut national de l'audiovisuel, INA）やオランダ視聴覚研究所（Netherlands Institute for Sound & Vision）等と並んで世界の視聴覚アーカイブ活動を牽引する存在である。ちなみに、NFSAの歴史についてはエドモンドソン自身が2011年に提出した博士論文の中で総括した<sup>15)</sup>。

1987年にオーストラリア勲章（OAM）を受勲したエドモンドソンは、東南アジア太平洋地域視聴覚アーカイブ連合（South East Asia Pacific Audio Visual Archives Association, SEAPAVAA）【表1】の創設に尽くし、1996年にSEAPAVAA初代会長に就任した。2001年にNFSAを退き、2003年にAMIAシルバーライトアワードを受賞した後もその行動力は衰



画像1 レイ・エドモンドソン近影（レイ・エドモンドソン氏提供）

えを知らず、世界各国で後進の育成に励んでいる<sup>16)</sup>。

## 2 増補改訂の経緯——初版から第3版へ

研究者としてのエドモンドソンは、視聴覚アーキビスト教育、アウトリーチ、アドボカシー等を専門とし、図書館情報学だけでなく博物館学やアーカイブズ学等を参考にしつつも、あくまで視聴覚アーカイブ学の理論構築に腐心した。先述の通り、1998年に出版した初版、その6年後に「動的映像の保護及び

保存に関する勧告」の採択25周年を記念して出版した第2版からさらに12年の時を経て、エドモンドソンがなぜ『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の作成を決意したかということ、その理由は2011年から2012年にかけて視聴覚アーカイブ活動の領域に押し寄せた急激なデジタル化にあった。時代の要請に応えるべく加筆された草稿は、2015年7月に「国際レファレンス・グループ」【表4】[\*1]に向けて送信された。

「国際レファレンス・グループ」とは、8カ国（オーストラリア、シンガポール、ドイツ、ナミビア、フィリピン、ブラジル、メキシコ、そして日本）の専門家8名から成る査読グループである。第2版の日本語版を作成した経験から、光栄なことに筆者もグループの一員としての関与を許された。草稿を精読した面々は、同年8月から10月にかけて電子メール、スカイプ、SNS等を使って議論を重ね、このとき寄せられたアイディアの多くがエドモンドソンの采配によって本文に反映された。結果的に結論部分を除く全章が増補改訂され、草稿から決定稿に至る一連の記録は段階的に7件のワードファイルとして残された。

ここでは最終的に採用されなかった日本からの提案についても紹介したい。発端として、視聴覚アーカイブ活動を研究する児玉優子より初版付録（全3頁）[\*2]の削除理由と復活の可能性を尋ねられた。調べてみると出典はオーストリア国立フォノテーク（現オーストリア国立メディアテーク）に所属する音声記録の専門家ライナー・フーベルト（Rainer Hubert）の1994年の論文で、フーベルトは先述の *Audiovisual Archives: A Practical reader* の執筆者のひとりでもあった。この論文内のダイアグラム【画像2】の黒塗りの箇所は、アーカイブズ、図書館、ミュージアムの「視聴覚部門」を指す。紙幅の都合で第2版以降は引用されなくなったが、日本のように国立の総合的な視聴覚アーカイブ機関を持たない国や地域では、現在でもこのような図示が理解の助けになるかもしれない。また、エドモンドソンが執筆の参考にした初期の資料のひとつとしても興味深い。

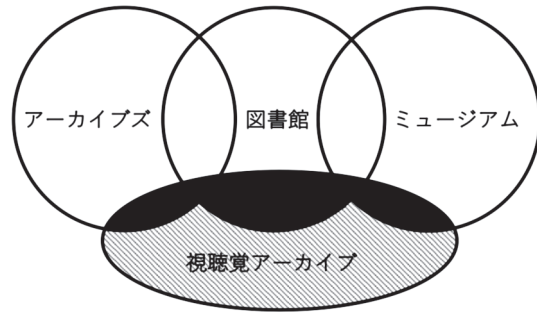
児玉は2004年の日本アーカイブズ学会研究集会において、はやくも第2版の内容を日本



に紹介した研究者である。そして児玉の勤務先の財団法人放送番組センター（現公益財団法人放送番組センター）が、総務省の委託事業「文化資産としての放送番組アーカイブの利活用促進に関する調査」の一環として第2版の日本語版を初めて出版した【表2】。

筆者はこのとき監修に携わったが、時間の制約から不本意な点も残された。

そこで2009年から2011年にかけてエドモンドソンの指導を仰ぎ、児玉との勉強会形式で日本語改訂版『視聴覚アーカイブ活動：その哲学と原則』を作成・公開した。2016年の時点ではこれが日本語で読める最新版であった。



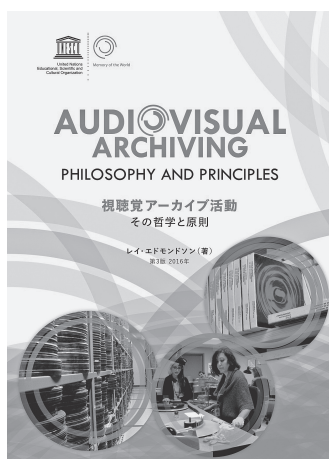
画像2 ライナー・フーベルトのダイアグラム再現図

### 3 日本語版『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の翻訳・公開

『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の国際レファレンス・グループに参加した経緯から、同文献の日本語版の作成・公開も引き続き筆者が担当することになった。本文の翻訳作業に着手した2017年4月以降、必要に応じてエドモンドソンとメールで連絡を取り合って不明点の解消に努めたが、それ以上に顔を合わせての議論は有益であった。というのも同年7月にMOWCAPの会議が東京で催された折、およそ8年振りにエドモンドソンと再会したからである<sup>17)</sup>。このとき中国語版を作成していた中国国家档案局・中央档案馆の王紅敏とも面識を得た。

翻訳作業が完了し、編集作業へと移ったのはようやく2017年11月末のことであった。オリジナルの英語版のデザインやレイアウトを踏襲するため、ユネスコからDTPのデータ（Adobe InDesign）を事前に受け取ってはいたが、いざ始めてみると日本語に合わせた読みやすい書式スタイルを作り直す必要が生じ、URLのリンク切れや国際レファレンス・グループのメンバーの肩書きにも変更が見受けられ、校正者の助言によって5つの用語（マイグレーション、ポーンデジタル、組織記述子、アーティファクト、ドキュメンテーション）に手短かな解説を加えることにもなった。こうしたことから編集には思いのほか手間取ったが、共訳者の児玉をはじめとする複数の協力者の助けを借りて、2018年3月に日本語PDF版をNPO法人映画保存協会およびユネスコのウェブサイト上に公表した<sup>18)</sup>。PDF版の完成後に作成した冊子版は、国立国会図書館、東京都立図書館、国立映画アーカイブ図書室、神戸映画資料館で閲覧できる。PDF版にせよ冊子版にせよ、ひとりでも多くの方にその中身をご一読いただきたい。

オリジナルの英語版の段階で既に英語圏外の読者への配慮がなされていたからか、志を同



画像 3 『視聴覚アーカイブ活動——その哲学と原則 第3版』の表紙

じくする各国のボランティアが次々と翻訳作業に着手した。まず 2017 年 11 月、レファレンス・グループの一員カルロス・ロベルト・デ・ソウザ（ブラジル視聴覚保存協会）がブラジルのユネスコ国内委員会からポルトガル語版を発行した。2018 年 1 月の中国語版、3 月の日本語版がそれに続き、9 月には同じくレファレンス・グループの一員ペルラ・オリビア・ロドリゲス（メキシコ国立自治大学フィルムアーカイブ）がサン・ルイス・ポトシ自治大学と協力してスペイン語版を発行した。10 月には先述の〈世界視聴覚遺産の日〉を祝い、タイのフィルム・アーカイブ（公共機構）がタイ語版を出版。2018 年 11 月現在、翻訳作業が進行中のビルマ語版やペルシア語版等を加え、最終的には 7 ケ国語以上で出版される予定である。

## 第 3 章 『視聴覚アーカイブ活動 第 3 版』が訴えること

### 1 デジタル化への対応とターミノロジーの変化

レイアウト等の違いから単純に頁数だけでは比較できないが、初版は 60 頁、第 2 版は 73 頁、そして『視聴覚アーカイブ活動 第 3 版』は 90 頁<sup>19)</sup>と厚みを増し【表 4】[\*3]、初版では 8 件に過ぎなかった付録の参考文献も 40 件になった [\*4]。さらに全頁をカラー化し、冒頭に要旨 [\*5] を、そして本文に画像 24 点を添えたことから格段に読みやすくなった。2004 年に第 2 版が出版された後に顕著となった課題——ポーンデジタル作品の収集・保存や旧来のアナログメディアのデジタル化等——に関連する箇所については全章にわたって丁寧な修正が施された。こうしたデジタル化への対応に伴い、知的財産権、著作権、そして法制度への言及も全体的に増えた。

各種メディアの旧式化の状況を示す付録「5 形状の変化と旧式化（一部の形状に限る）」[\*6]からは、デジタル化にとどまらない視聴覚メディアの変遷を読み取ることができる。例えば第 2 版ではかろうじて現役であった磁気素材の VHS テープは完全に旧式化し、CD や DVD 等の光学ディスクも瞬間に時代遅れになりつつある。片や、当時は目新しかったインターネットからのダウンロードやストリーミングはごく日常的な手段となった。時の経過とともに視聴覚メディアの旧式化が進行するのは当然のことと思われるかもしれないが、主流から外れても映画フィルムの寿命はデジタル素材より遥かに長く、興味深いことには、アナログレコードのように 2010 年代に入って需要が復活した事例もある。

かつて頻出語であった「MLA 機関」（ミュージアム、図書館、アーカイブズの総称）が

「記憶機関」(Memory Institution) に置き換わるとともに、収集・保存機関の専門家は「記憶専門家」(Memory Professional) となった。何れの用語も一般に浸透してはいないが、先述の「デジタル形式を含む記録遺産の保護及びアクセスに関する勧告」の文部科学省による仮訳が「文書館、図書館、博物館並びに他の教育的な、文化的な及び研究のための機関」を「記憶機関」としたことから、この訳語を採用することとした。旧式メディアを指す「レガシーフォーマット」等の新語もターミノロジーの変化を印象づける。とはいえ全8章の構成は第2版とほとんど同じであり、冒頭の要旨から内容の著しい変化は感じられないかもしれない。何が変わり、あるいは変化しなかったのかを次に見ていきたい。

表4 初版、第2版、第3版の構成（網掛けは第3版に初めて加筆された箇所、下線部は初版または第2版に加筆された箇所を示す）

1998年 初版 —全60頁	2004年 第2版 —全73頁	2016年 第3版 —全90頁*3
Preface		要旨 *5
		序文（ユネスコ パンコク事務所 所長 キム・グワンジョ）
	初版の前書き	第3版のための前書き
	第2版の前書き	
Editorial notes	編集ノート	凡例
	インターネット上の追加情報	
	謝辞	国際レファレンス・グループ紹介 *1
		著者紹介
<b>A: Introductory</b>	<b>1: Introduction</b>	<b>第1章 序論：基本原則</b> <b>(Fundamental principles)</b>
A1 Background	1.1 What is philosophy	1.1 哲学とは何だろう
	1.2 Philosophy and principles in audiovisual archiving	1.2 視聴覚アーカイブ活動の哲学と原則
	1.3 Current state of the audiovisual archiving profession	1.3 専門職としての視聴覚アーカイブ活動の現状
A2 Basic assumptions and issues	1.4 Major current issues	1.4 現在の主要な課題
	1.5 Historical context	1.5 歴史的なコンテキスト
	<b>2: Foundations</b>	<b>第2章基礎理論と歴史</b> <b>(history)</b>
	2.1 Basic assumptions	2.1 基本的な前提
C4 Relation to other professions	2.2 The collecting and custodial professions	2.2 <u>記憶専門職</u> (The memory professions)
	2.3 Values	2.3 価値観

A4 Is audiovisual archiving a profession?	2.4 Audiovisual archiving as a profession	2.4 専門職としての視聴覚アーカイブ活動
C3 Skills, training and qualifications	2.5 Training of audiovisual archivists	2.5 視聴覚アーキビストの養成
⑦ Federations, associations, NGOs and others	2.6 The professional associations	2.6 専門職団体
	2.7 Producers and disseminators	2.7 製作者と情報伝達者
		2.8 格差の解消 (Bridging the divide)
	2.8 Reflection	2.9 省察
A3 Definitions and terms	<b>3: Definitions and terms</b>	<b>第3章定義、用語、<u>概念</u> (concepts)</b>
	3.1 The importance of precision	3.1 正確さの重要性
	3.2 Terminology and nomenclature	3.2 専門用語と命名法
	3.3 Key concepts	3.3 主要な概念
<b>B: The audiovisual archive</b>	<b>4: The audiovisual archive</b>	<b>第4章視聴覚 アーカイブ：<u>類型とパラダイム</u> (typology and paradigm)</b>
B2 Historical emergence	4.1 Historical emergence	4.1 歴史への登場
	4.2 Scope of activities	4.2 活動範囲
B1 Definition and typology (9 類型)	4.3 Typology (9 類型)	4.3 類型 (11 類型)
	4.4 World view and paradigm	4.4 世界観とパラダイム
B3 Nature of the audiovisual industry	4.5 Key perspectives of audiovisual archives	4.5 視聴覚アーカイブの主要な視点
	4.6 Supporters and constituencies	4.6 支援者、支持基盤、 <u>アドボカシー</u> (advocacy)
	4.7 Governance and autonomy	4.7 ガバナンスと自律性
<b>C: The profession</b>	<b>5: Preservation: exploring nature and concept</b>	<b>第5章保存と <u>アクセス</u> (access)：特質と概念の探究</b>
	5.1 Fundamentals: objective and subjective	5.1 基本事項：主観と客観
C1 Nature of the audiovisual media	5.2 Decay, obsolescence and migration	5.2 劣化、旧式化、マイグレーション
C2 Guiding principles (2.3 Carrier/content principle)	5.3 Content, carrier and context	5.3 コンテンツ、キャリア、コンテキスト、 <u>構造</u> (structure)
	5.4 Analogue and digital	5.4 アナログとデジタル
	5.5 Concept of the work	5.5 作品の概念
	<b>6: Management principles</b>	<b>第6章管理の原則</b>

B The audiovisual archive	6.1 Introduction	6.1 はじめに
	6.2 Policies	6.2 方針
	6.3 Collection development: selection, acquisition, deselection and disposal	6.3 コレクション構築：選別、取得、除外、処分
	6.4 Preservation, access and collection management	6.4 保存、アクセス、コレクション管理
	6.5 Documenting	6.5 ドキュメンテーション
	6.6 Cataloguing	6.6 目録作業
	6.7 Legalities	6.7 法的義務
	6.8 No archive is an island	6.8 孤立した「視聴覚」アーカイブはない
		6.9 「デジタル格差」という総称 (The “digital divide” – an umbrella term)
		6.10 環境インパクト (Environmental impact)
<b>D: Ethics</b>	<b>7: Ethics</b>	<b>第7章倫理と アドボカシー (advocacy)</b>
D1 General	7.1 Codes of ethics	7.1 倫理規程
	7.2 Ethics in practice	7.2 倫理の実践
D2 Institutional	7.3 Institutional issues	7.3 組織の問題
D3 Personal	7.4 Personal issues	7.4 個人の問題
		7.5 アドボカシー
	7.5 Power	7.6 権限
<b>E: Conclusion</b>	<b>8: Conclusion</b>	<b>第8章結論</b>
<b>Appendix</b>	<b>Appendix</b>	<b>付録</b>
① Definition of audiovisual media		
⑥ Glossary	1 Glossary and index	1 用語集と索引
② Comparative table: audiovisual archives, general archives, libraries and museums *2	2 Comparative table: audiovisual archives, general archives, libraries and museums	2 視聴覚アーカイブ、公文書館、図書館、博物館の比較表
	3 Reconstruction statement	3 再構成の声明書
⑤ Bibliography/Further reading (8冊)	4 Selected reading list (14冊)	4 文献目録 (40冊) *4
③ Format change and obsolescence: selected formats	5 Format change and obsolescence: selected formats	5 形状の変化と旧式化 (一部の形状に限る) *6
④ The internet		



## 2 『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の前半(第4章まで)

「第1章 序論：基本原則」に続く「第2章 基礎理論と歴史」においてエドモンドソンは、視聴覚アーカイブ活動が博物館学、図書館学、アーカイブズ学といった既存の専門領域から派生したのではなく、ましてや、それらの下位の概念でもないことを前提として示す(2.1 基本的な前提)。第2章で視聴覚アーカイブそれ自体が独立した存在であると宣言するスタイルは初版から変わらない。また、視聴覚アーカイブ活動はかくあるべし、といった理想を書き連ねるのではなく、現実在即した客観的な記述を心がけることを読者に約束する。この領域の研究の深まりや各機関の発展のため、視聴覚アーキビスト養成、そして養成された視聴覚アーキビストが入会する専門職団体にも着目し、「専門職に認定、討議、発展の場を提供し、会員の利益を全面的に支援」する存在として国際機関をとりわけ重視する(2.5 視聴覚アーキビストの養成)。

視聴覚アーカイブ活動にまつわる頻出語は辞書的に多様な意味を持ち、同一の用語が類縁領域とまったく異なる使われ方をしているもおかしくない。それだけにエドモンドソンはターミノロジーの問題を重要事項として慎重に取り扱う。本報告ではとくに優先順位が高いと考えられる「視聴覚アーカイブ」と「視聴覚アーキビスト」の定義を以下に引用するにとどめるが(下線部は第2版から書き換えられた箇所を指す)、「第3章 定義、用語、概念」はこの領域の辞典としての役割を十分に果たすほど数多くの用語を定義づけ、概念を紹介する。

### ● 視聴覚アーカイブの定義 (3.3.3)

視聴覚アーカイブとは、視聴覚資料 (documents) のコレクションや視聴覚遺産を収集、保存、普及し、それらへの管理されたアクセスを提供するための法令その他の権能を持つ組織または組織内の一部門である。

### ● 視聴覚アーキビストの定義 (3.3.4)

視聴覚アーキビストとは資格要件を正式に満たす者、認可を受けている者、または視聴覚アーカイブで管理されるコレクションの構築、保存、アクセス提供や顧客への奉仕に専門家のレベルで従事している者である。

「第4章 視聴覚アーカイブ：類型とパラダイム」では視聴覚アーカイブ機関をより深く探求する。視聴覚アーカイブのための国際機関が初めて設立されたのは1930年代のことで、その後、既に存在していた組織や機能が次第に「視聴覚アーカイブ」という名称で認識されるようになった。来歴の異なる8機関もがCCAAA【表1】に加盟するのはそのためである(4.1 歴史への登場)。

現代の視聴覚アーカイブにはテーマ別やメディア別の機関もあれば、総合的な国立レベル

の機関もあり、全貌が掴みづらい。そこでエドモンドソンは、〔1〕非営利／営利、〔2〕自律性の度合い、〔3〕地位、〔4〕利用者、〔5〕メディアの範囲と機能、〔6〕特徴と力点を指標として——例外が多いことを断った上で——分類作業を試みる。第3版では第2版の9類型に「コミュニティの〔視聴覚〕アーカイブ」と「オンラインのデジタル〔視聴覚〕アーカイブ」を加え、以下の通り11類型（4.3 類型）を紹介する。昨今の発展目覚ましい小規模な「コミュニティの〔視聴覚〕アーカイブ」の追加は当然の流れと考えられるが、資料を長期保存するための専用収蔵庫を持たない「オンラインのデジタル〔視聴覚〕アーカイブ」の追加には疑問も残る。

第4章ではまた、視聴覚アーカイブ機関とその他の記憶機関を比較する。例えば、原秩序の尊重や出所原則といったアーカイブズ学の考え方は視聴覚資料には当てはまらない。唯一無二のマスター素材を保存するという意味で視聴覚資料はミュージアムのモノ資料に近く、公共アクセスを無料で提供する図書館とは役割が明らかに異なる。視聴覚アーカイブ機関が直面する著作権の問題はどの類縁機関より複雑であり（4.4 世界観とパラダイム）、映画作品、テレビ番組、楽曲等を素材、情報、芸術、記録として分けて受け入れるのではなく、すべてを一体として同時に受け入れることにも特徴がある（4.4.6 視聴覚アーカイブのパラダイム）。さらに「〔視聴覚〕アーカイブ機関の成功に重きを置き、程度の差こそあれ、〔視聴覚〕アーカイブ機関側も一定の説明責任を果たすような友人たちや利害関係者のコミュニティ」（4.6 支援者、支持基盤、アドボカシー）に対して敬意を払うことも忘れない。

#### ● 視聴覚アーカイブ機関の11 類型（4.3.7）

- 1 放送アーカイブ Broadcasting archives
- 2 プログラミング・アーカイブ Programming archives
- 3 視聴覚博物館 Audiovisual museums
- 4 国立視聴覚アーカイブ National audiovisual archives
- 5 大学の／学術的な〔視聴覚〕アーカイブ University and academic archives
- 6 テーマを絞った／専門的な〔視聴覚〕アーカイブ Thematic and specialized archives
- 7 映画会社の〔視聴覚〕アーカイブ Studio archives
- 8 地域／市／地方の〔視聴覚〕アーカイブ Regional, city and local archives
- 9 コミュニティの〔視聴覚〕アーカイブ Community Archives
- 10 オンラインのデジタル〔視聴覚〕アーカイブ Online digital archives
- 11 記憶機関全般 Memory institutions generally

### 3 『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の後半（第5章から）

「第5章 保存とアクセス：特質と概念の探究」では、視聴覚アーカイブ活動の両輪であ

る保存とアクセス提供（活用）を論じる。エドモンドソンは第3章でも「保存に完了はない」（3.2.6 保存とアクセス）と述べており、視聴覚アーキビストの使命としてアクセス提供と同等に、あるいはそれ以上に「保存」に力点を置く傾向がある。

視聴覚資料の保存の考え方は極めて特徴的である。いかなる形態のアナログ資料にも〈コンテンツ Content=内容、中身〉と〈キャリア Carrier=素材、モノ〉があるが、視聴覚資料の場合この二つがとりわけ密接に結びついているため、コンテンツだけでなくキャリア（映画フィルム、磁気テープ、光学ディスク等）も保存し、何れもアクセス可能にする必要がある。デジタル化して公開せよという外的な要求の高まりから、視聴覚資料のコンテンツであっても異なるキャリアを使ってコピーを作成し、情報を移し替えることがある。移し換えるとなれば情報を損ない、〈コンテキスト Context=文脈、環境〉を歪め、コンテンツまで脅かすことになりかねない。アナログの視聴覚資料の多くはモノ資料であり、デジタル技術を介してコピーを作成した後にオリジナルのキャリアが旧式化しても、その価値が下がることはない。したがって視聴覚アーカイブ機関は、新しいテクノロジーを追いかけながらも古いテクノロジーを維持して新旧の技術基盤を整える。

エドモンドソンは、コンテンツ、キャリア、コンテキストを三位一体で収集・保存して利用に供する考え方を視聴覚アーカイブ活動の原則として明示した。初版の「キャリア／コンテンツ原則」が第2版で「コンテンツ／キャリア／コンテキスト原則」へと展開し、日本では岡島尚志（現 NFAJ 館長）がこれを「3C 原則」と名づけて繰り返し理解を促してきた<sup>20)</sup>。第3版では、国際公文書館会議（International Council on Archives, ICA）【表1】の電子記録委員会による「記録」の定義、つまり「機関や個人の活動の開始時、実施時、完了時に作成また受領され、その活動に証拠を与えるに足る内容、コンテキスト、構造から成る、記録された情報」<sup>21)</sup>を視聴覚資料に当てはめることによって〈構造 structure〉を加え、「コンテンツ／キャリア／コンテキスト／構造原則」とした（5.3）。例えばインターネット配信を想定して作成された視聴覚コンテンツは、従来の意味でのキャリアを持たないが、「ダウンロードする」という形態やその前提となるインターネット環境はコンテキストの一部として欠かせない。いつの時代のどのような社会構造や産業構造において誰が作成し、どのような方法で受容した資料なのか、視聴覚アーキビストはその把握に努める。アクセス提供において完全に同一な再現は不可能であっても、オリジナルの体験にできる限り近づける努力を惜しまず、構造的な変化のために再現できないコンテキストは解説を添える等、何らかの方法でその溝を埋め合わせる。

「第6章 管理の原則」が扱うコレクション管理は、マイグレーションの対象となるコンテンツの優先順位付け、ドキュメンテーション、目録作業といった広範な業務を含む。ここでエドモンドソンは、業務に関連する方針の策定および策定した方針の公開の必要性を説く。策定した方針が形骸化しないように日常業務と調和させることはもちろん、ユネスコや

CCAAA 加盟機関の提供する国際標準とも調和させ、その上で遵守することが肝要である (6.2 方針)。

「第7章 倫理とアドボカシー」では倫理規程を取り上げる。掲載順は前後するが、視聴覚アーキビストが身につけるべき知識としては初版に5項目、第2版に7項目、そして第3版には以下の通り10項目が並ぶ (2.5 視聴覚アーキビストの養成)。第2版に加えたのは「保存とアクセスのための技術的な基礎」と「コレクション管理の戦略と方針」、そして第3版に加えたのは「デジタルの概念およびテクノロジーの基礎的な理解」「知的財産の法律と概念の理解」「アドボカシーと倫理の理解」である。2010年に正式な倫理規定を採択したAMIA等 (7.1 倫理規程)<sup>22)</sup>、過去10年のあいだに国際機関の活動内容は洗練されてきたが、日本の記憶機関は成文化された方針を持たず (公表せず)、コレクション管理の概念や倫理規定【表5】を欠くことも珍しくない。

● 視聴覚アーキビストが身につけるべき知識 (2.5.5)

- 1 視聴覚メディアの歴史 the history of the audiovisual media
- 2 視聴覚アーカイブ活動の歴史 the history of audiovisual archiving
- 3 現代史の理解 an understanding of contemporary history
- 4 多様な視聴覚メディアの記録技術の知識 knowledge of the recording technologies of the various audiovisual media \* 初版では「the technical nature of the various audiovisual media」
- 5 視聴覚メディアに関連する物理と化学の基礎 basic media-related physics and chemistry
- 6 デジタルの概念およびテクノロジーの基礎的な理解 technological basis for preservation and access
- 7 保存とアクセスのための技術的な基礎 collection management strategies and policies
- 8 コレクション管理の戦略と方針 basic understanding of digital concepts and technology
- 9 知的財産の法律と概念の理解 understanding of intellectual property law and concepts
- 10 アドボカシーと倫理の理解 understanding of advocacy and ethics

表5 CCAAA 加盟機関の倫理規程 (各機関のウェブサイトより)

策定年	Code of Ethics	邦訳	
1996	ICA—24ヶ国語	ICA アーキビストの倫理綱領 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会	2006
1998	FIAF—英語、仏語、スペイン語	FIAF 倫理規程全文 (斉藤綾子訳) 東京国立近代美術館フィルムセンター	1999
2010	AMIA—英語	AMIA 倫理規程 (2010年) 試訳 NPO 法人映画保存協会	2011
2017	IASA—英語	—	—

初版で数カ所に登場した「アドボカシー」(権利主張)という言葉は、第2版で若干増え、第3版では第4章(「4.6 支援者、支持基盤、アドボカシー」)および第7章に繰り返し登場する(「7.5 アドボカシー」)。アドボカシーとなればオーストラリアの、そして世界の視聴覚アーカイブ活動の突出したアドボケート(唱導者)として知られるエドモンドソンの面目躍如である<sup>23)</sup>。以下の引用は、読者——とりわけ現役の視聴覚アーキビスト——への励ましのメッセージとしても読める。

視聴覚専門家はアドボケートとしては消極的過ぎる。能力がないわけではない——むしろその逆である。ただ、この分野に惹かれた人材の中で概してアドボカシーは不人気で、皆がアドボケート(唱導者)より「守護者」——つまり信用できる、作業重視の、頼りになる裏方の存在——になりたがる。直感的かつ内向的で、政界から距離を置き、敵対関係も回避したが。 (中略) 専門家なら当然、執筆し、メディア取材を受け、個別の会合に出席してこの能力を発揮できる。著者の経験からすると政治家やジャーナリストは、ただ雇われただけで深い知識や興味を持たないロビイストより、仕事に情熱を傾ける専門的なアーキビストの話を知りたい。 (7.5.2)

#### 4 新たな話題——デジタル格差と環境インパクト

前述の「アドボカシー」のほか、エドモンドソンが第3版から新たに追加した事項に「デジタル格差」(「2.8 格差の解消」「6.9 「デジタル格差」という総称」)と「環境インパクト」(「6.10 環境インパクト」)がある。

ここでの「格差」はデジタル化がもたらした先進国と発展途上国の格差を意味する。国際協力の意義は初版から引き続き強調し、第2版から変わらず「孤立した視聴覚アーカイブはない、孤立している場合ではない」(6.8)と訴えるが、「デジタル格差」という言葉自体の使用は第3版が初めてである。次に引用するような途上国で実践可能な解決策の提案においては、必ずしも先進国や英語圏を中心に据えるのではないユネスコらしい視点が効果を発揮する。予算の乏しさという意味では日本の記憶機関も深刻かつ恒常的な問題を抱えており、悪条件の中でいかに知恵を絞って工夫すべきか考えさせられる一節でもある。

途上国の制約的な状況においては、時間を稼ぎ、物事を前に進めながら別の方策を探る必要がある。制約があるなら焦点を絞って優先順位を設定し、より迅速に決断を下し、与えられた条件下で最善を尽くさねばならない。たとえ最良の設備が入手できなくても、危機に瀕したキャリアが複製できるなら低品質でも構わない——何もしないよりましである。例えばコレクションの現物を配置換えしてセキュリティを改善し、資料を見つけ



やすくするような作業なら、ほとんどお金をかけず、いつでも試みることができる。

(2.8.4)

不適切な処理や回収による環境汚染や健康被害を引き起こす電子廃棄物（E ウェイスト）も社会問題となっている。具体的な地域としては、2014 年の国際共同制作のドキュメンタリー番組 *The E-Waste Tragedy*（日本では 2015 年に「廃棄家電の悲しき行く末」の題名で BS-NHK が放映）の舞台となったガーナのアグボグブロシーや、中国広東省汕頭（シャントウ）市の貴嶼（ギユ）地区等が知られる。こうした「環境インパクト」を根拠とする問題提起がデジタル化の進行に歯止めをかけることはないにせよ、少なくとも視聴覚アーキビストがオリジナル資料の長期保存戦略を練る際には有効である。エドモンドソンは 2015 年の SEAPAVAA シンガポール会議におけるリンダ・タンディック（現 Digital Bedrock 社 CEO）の研究発表に基づいて「環境インパクト」の項目を加筆し、環境への配慮を次のように提言する<sup>24)</sup>。

● 環境に配慮ある〔視聴覚〕アーカイブが利用可能な選択肢のチェックリスト

- ・エネルギー使用を最小限に抑える。化石燃料ではなくクリーンな電力を選ぶ。再生可能な電力の選択肢がないか調べる。
- ・厳しく選別してより少ないアイテムをデジタル化する。
- ・ハードウェアを取得し、その動作を設定する際に、エネルギー効率の最も良い方法を選択する。
- ・サイズが大きく頻繁にアクセスしないファイルはオフラインに保管する。
- ・可能な限りリサイクルする。そのため、リサイクル業者の認証情報を確認する。

(6.10.5)

急激なデジタル化の影響で深刻な問題が増大しているような印象もあるが、『視聴覚アーカイブ活動 第3版』の加筆作業からは、未来志向の話題や明るい可能性を読み取ることもできる。それでも「第8章 結論」はこれまで通り、「〔視聴覚アーキビストの〕小さなコミュニティは、献身的で粘り強いがほとんど目立たず、賞賛も受けない。ところが担う任務はとても重い」とし、重責を担っているにもかかわらず視聴覚アーカイブ活動が社会の中で認知されていない状況を指摘する。これからの若い世代の視聴覚アーキビストはこの指摘を念頭に、より積極的なアウトリーチやアドボカシーのあり方を模索すべきではないだろうか。

## おわりに——本調査のまとめと結論

ユネスコが守り残そうとする文化遺産は、建築、古代遺跡、美術品と多様であり、視聴覚資料はそのごく一部に過ぎない。だからこそ、視聴覚アーカイブ活動の基礎研究やその成果出版の促進、専門職団体の創設、そして関連する記念日の制定等をもたらした「動的映像の保護及び保存に関する勧告」(1980 年)の採択は、実に意義深い出来事であった。

ユネスコの貢献により 1990 年代に体系化された視聴覚アーカイブ活動の哲学と原則は、英語圏とはいえ欧米から地理的に離れたオーストラリアにおいて、図書館という類縁領域から NFSA を独立・発展させてきたエドモンドソンの実体験に裏付けられているからこそ説得力が増す。『視聴覚アーカイブ活動 第 3 版』の内容を概観すると、日本では軽んじられてきた視聴覚アーキビストの教育・養成、専門職のネットワーク強化、用語の定義、方針や倫理規程の策定、そしてアドボカシーの何れもが重んじられている。これらを学び取ることができれば日本の状況改善——より具体的には視聴覚資料の救済——にも大いに期待が持てる。

初版や第 2 版と比較しながら第 3 版を翻訳する作業を通して気づいたことには、視聴覚資料周辺の環境変化は目まぐるしいが、哲学と原則の根幹部分は初版から揺れ動くことがなかった。時代の流れに敏感かつ柔軟な思考と、確固たる倫理、哲学、原理、原則のあり方を組み合わせることによって「入門書」として長く読み継がれてきた『視聴覚アーカイブ活動 第 3 版』は、これからも微調整を加えながら深化していくに違いない。本調査報告は、将来の新版翻訳の参考になることも意識して執筆した。

視聴覚資料を利用する研究者や提供する専門家のみならず、いまやスマートフォンやタブレット等の普及とともに、視聴覚資料の作成や取り扱い是我々の日常生活にすっかり浸透している。本調査の成果として公開した日本語版『視聴覚アーカイブ活動 第 3 版』の読者も、限られた少数の人々ととどまることなく拡大していくはずである。エドモンドソンが常に読者からのフィードバックを歓迎しているように、邦訳に対しても忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いである<sup>25)</sup>。

### 謝辞

本稿は、2017 年度学習院大学人文科学研究所「若手研究者研究助成」を受けた「視聴覚アーカイブ活動の基本原則に関する研究——UNESCO「視聴覚アーカイブ活動：その哲学と原則」(第 3 版)を中心に」の調査報告です。本調査にご協力くださった児玉優子氏、香坂弓氏、井上齊氏、そしてレイ・エドモンドソン氏の日頃のご指導に心より深謝いたします。

註

- 1) 文化財の不法な輸出、輸入及び所有権譲渡を禁止し防止する手段に関する条約（1970年）、文化庁、<http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/kokusai/yushutsu/pdf/1000015211.pdf>, (2018-11-5 参照)。
- 2) この経緯については拙著『日本におけるフィルムアーカイブ活動史』（美学出版 2018）に詳しい。
- 3) 動的映像の保護及び保存に関する勧告（仮訳）、文部科学省、<http://www.mext.go.jp/unesco/009/004/026.pdf>, (2018-11-5 参照)。
- 4) Kula, Sam. History of Moving Image Archives. *Appraising Moving Images: Assessing the archival and monetary value of film and video records*. The Scarecrow Press, 2003. pp. 9-22.
- 5) この勧告によると「記録遺産」は「地域社会、文化、国又は人類一般にとって相当及び永続的な価値を有し、その劣化又は損失が有害な衰退となり得るような単体の文書又は文書群を含む」、「文書」は「アナログ又はデジタルの情報コンテンツ及びこれらのコンテンツが存在する媒体を含む」、「コンテンツ」は「複写し、又は移行することができる記号又は符号（例えば、テキストのようなもの）、イメージ（静的又は動的なもの）及び音から成り得る」。デジタル形式を含む記録遺産の保護及びアクセスに関する勧告（仮訳）、文部科学省、<http://www.mext.go.jp/unesco/009/1393877.htm>, (2018-11-5 参照)。
- 6) 会員数は2018年9月時点で公式ウェブサイトに掲載されている数字等を参考にした。
- 7) *Audiovisual Archives: A practical reader*〔視聴覚アーカイブ：実用読本〕(1997年)のほかに *Curriculum Development for the Training of Personnel in Moving Image and Recorded Sound Archives*〔動的映像および音声記録アーカイブの人材養成カリキュラムの開発〕(1990年)、*Legal Questions Facing Audiovisual Archives*〔視聴覚アーカイブが直面する法的課題〕(1990年)、*Audiovisual Archive Literature: Select bibliography*〔視聴覚アーカイブの文献：選択書目〕(1992年)がある。
- 8) 安澤秀一、ユネスコ本部文書館専門官エヴァンズ博士を案内して、史料館報39、国文学研究資料館史料館、1983. pp. 6-8.
- 9) 2018年のスローガンは「Your Story is Moving! 映像、それは感動の物語」。この記念日を祝って企画された世界の催事92件がCCAAAのウェブサイトに掲載されている。World Day for Audiovisual Heritage 2018. CCAAA. <https://www.ccaaa.org/WDAVH2018>, (2018-11-5 参照)。
- 10) UNESCO 世界視聴覚遺産の日をご存知ですか？、東京国立近代美術館フィルムセンター、<http://www.momart.go.jp/fc/learn/unesco/>, (2018年11月5日参照)、E1116-世界視聴覚遺産の日 各国でイベントが開催される、カレントアウェアネス-E. No.183. 2010.11.18. <http://current.ndl.go.jp/print/book/export/html/17128>, (2018-11-5 参照)。
- 11) 製作50周年記念『2001年宇宙の旅』70mm版特別上映、国立映画アーカイブ、<http://www.nfaj.go.jp/exhibition/unesco2018/>, (2018-11-5 参照)、『2001年宇宙の旅』70ミリ版特別上映、国立映画アーカイブの挑戦と課題、文化通信インタビュー、<https://www.bunkatsushin.com/varieties/article.aspx?id=3271>, (2018-11-22 参照)。
- 12) Memory of the World. UNESCO. <https://en.unesco.org/programme/mow>, (2018-11-5 参照)。
- 13) Pre-Conference Workshops & Symposia. AMIA. <http://www.amiaconference.net/pre-conference-workshops-symposia/>, (2018-11-5 参照)。
- 14) レイ・エドモンドソン、アーカイブの成長と達成——オーストラリアの転機、フィルム・アーカイブの仕事——再定義 国際シンポジウム（東京・2000年）の記録、東京国立近代美術館

- フィルムセンター, 2003. pp. 25-35.
- 15) Edmondson, Ray. *National Film and Sound Archive: The quest for identity: factors shaping the uneven development of a cultural institution*. University of Canberra, 2011. NFSA については次の文献も詳しい。レイ・エドモンドソン, 政府が過ちを犯すとき: 長距離走者としてのアーキビストとアドボカシー (When Governments Make Mistakes: Advocacy and the long-distance archivist). 映画保存協会, 2008. <http://filmpres.org/preservation/etc08/>, (2018-11-5 参照)。
- 16) Archival Associates. <http://www.archival.com.au>, (2018-11-5 参照)。アーカイバル・アソシエーツはコンサルタントとしてのエドモンドソンの現在の所属先である。
- 17) 同時期に学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻等が現 MOWCAP 副議長を務めるベトナム国家記録アーカイブズ局代表ヴー・ティ・ミン・フオンを招き、公開講演会「世界記録遺産プログラムとベトナムの取り組み」を催した。
- 18) エドモンドソン, レイ, 視聴覚アーカイブ活動——その哲学と原則, ユネスコ, 2016. NPO 法人映画保存協会, [http://filmpres.org/wp2/wp-content/uploads/2018/03/ava3rd\\_japanese.pdf](http://filmpres.org/wp2/wp-content/uploads/2018/03/ava3rd_japanese.pdf), (2018-11-5 参照), *Audiovisual Archiving: Philosophy and principles*. UNESCO Bangkok. <https://bangkok.unesco.org/content/audiovisual-archiving-philosophy-and-principles>, (2018-11-5 参照)。
- 19) 日本語版は全 76 頁である。
- 20) 「3C 原則」は岡島によって 2006 年頃より日本に紹介されてきたが、最新と思われるのは次の文献である。岡島尚志, 映画文化財の長期保存——問題点の整理とフィルム・アーカイブの役割, 書物と映像の未来——グーグル化する世界の知の課題とは, 岩波書店, 2010. pp. 78-80., (映画のメディア論的位置づけ)。
- 21) 国際公文書館会議アーカイブズの観点から見る電子記録管理ガイド (1997 年), 国立公文書館, 2006. [http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/ICASTUDY8\\_ELECTRONIC\\_RECORDS\\_JPN.pdf](http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/ICASTUDY8_ELECTRONIC_RECORDS_JPN.pdf), (2018-11-5 参照)。
- 22) AMIA 倫理規程 (2010 年) 試訳, NPO 法人映画保存協会, <http://filmpres.org/preservation/rinrikitei/>, (2018-11-5 参照)。
- 23) エドモンドソンは 2018 年 11 月に AMIA アドボカシー賞を受賞した。AMIA. <http://www.amiacconference.net/2018-award-recipients/>, (2018-12-28 参照)。
- 24) The Environmental Impact of Digital Preservation : Research notes. [http://static1.squarespace.com/static/56844dac0ab37742d396c9a6/t/5684b8b85a5668c115f03222/1451538616838/Environmental\\_impact\\_digitalpreserv\\_Tadic\\_notes.pdf](http://static1.squarespace.com/static/56844dac0ab37742d396c9a6/t/5684b8b85a5668c115f03222/1451538616838/Environmental_impact_digitalpreserv_Tadic_notes.pdf), (2018-11-5 参照)。
- 25) 連絡先: Ray Edmondson [ray@archival.com.au](mailto:ray@archival.com.au), NPO 法人映画保存協会 [info@filmpres.org](mailto:info@filmpres.org)

## 参考文献

- A Philosophy of Audiovisual Archiving*. UNESCO, 1998. <http://unesdoc.unesco.org/images/0011/001131/113127eo.pdf>, (2018-11-5 参照)。
- Audiovisual Archiving: Philosophy and principles*. UNESCO, 2004. [https://www.researchgate.net/profile/Ray-Edmondson/publication/265756727\\_Audiovisual\\_Archiving\\_Philosophy\\_and\\_Principles/links/54e529750cf276ceec1735bc9.pdf](https://www.researchgate.net/profile/Ray-Edmondson/publication/265756727_Audiovisual_Archiving_Philosophy_and_Principles/links/54e529750cf276ceec1735bc9.pdf), (2018-11-5 参照)。
- Recommendation for the Safeguarding and Preservation of Moving Images*. UNESCO. [http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL\\_ID=13139&URL\\_DO=DO\\_TOPIC&URL\\_SECTION=201.html](http://portal.unesco.org/en/ev.php-URL_ID=13139&URL_DO=DO_TOPIC&URL_SECTION=201.html), (2018-11-5 参照)。
- 石原香絵, 日本における視聴覚アーカイブ活動史, 美学出版, 2018.

*Memory of the World, General Guidelines to Safeguard Documentary Heritage*. UNESCO, 2002.

日本ユネスコ国内委員会. 文部科学省. [http://www.mext.go.jp/result\\_js.htm?q=General+Guidelines+to+Safeguard+Documentary+Heritage&search=x#resultstop](http://www.mext.go.jp/result_js.htm?q=General+Guidelines+to+Safeguard+Documentary+Heritage&search=x#resultstop), (2018-11-5 参照).

野口昇. ユネスコ 50 年の歩みと展望——心のなかに平和のいしずえを. シングルカット, 1966.

荻昌朗. ユネスコの動的映像保存会議に出席して. 世界のフィルム・ライブラリー 1976 年. フィルム・ライブラリー協議会, 1977. pp.26-35.

宮坂逸郎. 映画フィルム、ビデオ・テープ類の保護と保存について勧告を準備中——ユネスコ. カレントアウェアネス 4. 国立国会図書館, 1979.

動的映像の保護及び保存に関する国際文書に関する検討資料. 文部省学術国際局文部省学術国際局ユネスコ国際部国際教育文化課, 1979.

伊藤延男. 動的映像の保護保存に関する勧告 政府専門家会議に出席して. 文化庁月報 141. 文化庁, 1980. pp.7-8.

## ENGLISH SUMMARY

### **Research on the Basic Principles of Audiovisual Archiving: Focusing on UNESCO's *Audiovisual Archiving: Philosophy and principles, The third edition***

**ISHIHARA Kae**

UNESCO is a long-term supporter of archival studies. In 1998, Ray Edmondson, a leading audiovisual archivist in Australia, was entrusted with the task of assembling a basic primer on audiovisual archiving to ensure the collection, preservation, and provision of access to audiovisual materials. Since then, his *Audiovisual Archiving: Philosophy and principles* has become a key text in the field with its latest (3rd) edition published in 2016. The book defines basic terminology and emphasizes the importance of education and training of audiovisual archivists, as well as networking within the profession, and although it introduces new topics such as the digital divide, advocacy, or environmental impact, its core philosophy and principles remain consistent. The Japanese version published in 2018 is expected to stimulate discussion and raise awareness of this area of study in order to save audiovisual materials, in which Japan lags behind other countries.

*Key Words:* UNESCO, Audiovisual Archivist, Ray Edmondson, Archives, Audiovisual materials